



ましまと

それでも遊び続ける理由

水戸こどもの劇場 三〇周年記念誌

目 次

I あいさつ

水戸子どもの劇場運営委員長 羽根坂 恵美子	2
茨城県知事 橋本 昌	3
水戸市長 岡田 広	4
水戸市青少年育成推進協議会 会長 海野 千秀	5
NPO 法人コモンズ 代表 帯刀 治	6
創立時運営委員 神林 昇	7
竹内 寿美子	8

II 今、遊びに夢中！！

感動を育む遊びの座談会	10
-------------	----

「遊ぶことに意味なんかない、楽しければそれでいいのよ」	14
-----------------------------	----

III 遊び場マップ

IV 伝えたい「遊び」	21
-------------	----

V 30周年記念事業	25
------------	----

VI 30周年記念公演	29
-------------	----

VII 年表：30年の動き	33
---------------	----

VIII 昔の水戸の街	42
-------------	----

IX 賛助会員	44
---------	----

はじめに

運営委員長 羽根坂恵美子

「こどもたちの澄んだ目と清純な心を守り育てていこう」と、1971年6月に水戸こどもの劇場は先生や、青年、母親たちの手で発足し、以来30年間「子ども達に夢と創造性を育む活動」を作り続けてきました。感動する心を育てる「生の舞台の鑑賞」と人と人のつながりを肌で感じができる遊びや、キャンプなどの体験を重んじた「創造活動」その中で多くの子どもが成人し、親になり、今、私たちの仲間として存在しています。この30年間という長い歳月を振り返るとき、地域の町の様子や、時代の変化に驚かされると同時に感動を覚えます。

水戸こどもの劇場は、この30年という節目を機に、また、新たな活動の原動力にしたいと30周年の記念事業として、「三つの記念地域公演」（わくわくさん…幼児対象）（やんさ太鼓…小学生対象）（松元ヒロ・ソロライブ中学生以上対象）の公演と、「30周年記念パーティ」の開催、「30周年記念公演（ミレット）」と、この「30周年記念誌」の発行をする事ができました。この多くの、大きな事業を開催することができたのも会員一人一人の力と、皆のやりたい気持ちが一つになったからだと思います。この原動力を、次の世代に繋げていきたいと切に願っています。

30年前に比べると社会は、変化し、こども達は何不自由のない環境で育っているように見えます。が、昨今のこども達の悲しい事件は、私たち大人社会の反映だと感じます。眞の豊かさとは何か、今こそ、気がついた大人たちが、子どもを大切に思っている大人たちが、人と人との繋がりを取り戻し、全力で子どもの輝きと生きる力を守る事に一人一人が取り組まなければならない時と感じています。これら30周年の記念事業も常にこども達へのメッセージを考えて行われてきました。

1999年8月にNPO法人を取得以来、水戸こどもの劇場は、多くの方々のご支援、ご賛同を受けています。その中で、私たちは、気がついた大人たちは、こども達のためにネットワークを広げ、多くの子どもたちに素敵な子ども時代を送る手助けをしていきたいと思っています。

この記念誌は、劇場の活動の集大成として子ども時代に一番大切な「遊び」をテーマに作りました。こども達の遊びのヒントになってもらえたと願い、昔遊びのコーナーや、無料の遊び場の地図も入っています。是非、ご活用ください。

NPO 法人水戸こどもの劇場
30周年記念誌祝辞

茨城県知事 橋本 昌



この度、めでたく創立 30 周年を迎られ、「遊び」をテーマにした記念誌を発行されますことを心からお慶び申し上げます。

運営委員長の羽根坂さんをはじめ、水戸こどもの劇場の皆様方には子どもたちの芸術活動や健全育成のために大変なご活躍をされていることは心から敬意を表します。

遊びは、子どもたちの健やかな成長に欠かせないものです。私も、子どもの頃は、いろんな遊びをしました。ペーチュウや缶けり、鬼ごっこや木登り、魚すくい、さらには、昆虫や小鳥取り（今は禁じられています）など、自然の中で、いろいろと工夫をしながら、また、たくさんの友だちと一緒に遊びました。

木から落ちて、頭に怪我をしたこともあります。中学校の頃は、朝一番に学校に行って、上級生を相手に野球やサッカーをして、上級生を負かしたこともあります。もちろん、漫画雑誌はほとんどのものを貸し借りしながら読みました。少年サンデー、少年マガジンの初版本も真っ先に買いました。

最近の子どもたちは、少子化の影響もありますが、塾やテレビゲームで忙しく、集団で遊ぶということをしなくなりました。

いろんな年代の集団の中で、遊びを教えたり、教わったりすることも、また、自然の中で遊ぶということも少なくなっているように思います。

このような中、この記念誌をとおし、いろいろな遊びの伝承や、遊びの楽しさ、大切さについて啓発を図られることは、誠に意義深いことあります。

水戸こどもの劇場の皆様には、30 周年を契機として、子どもたちの夢や創造力を育むため、なお一層ご尽力いただきますようお願いいたします。

I あいさつ

祝 辞

水戸市長 岡田 広



NPO 法人水戸こどもの劇場が、創立 30 周年を迎
えられましたことをお喜び申し上げます。

音楽・演劇などの芸術鑑賞をはじめ、さまざまな遊びやキャンプなどの創造活動を通じて、こどもたちの情操教育に熱心に取り組まれ、こどもたちが心豊かに成長する地域環境づくりにご尽力されている水戸こどもの劇場の関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

こどもたちは遊びの天才です。周囲の大人がちょっとしたきっかけを与えることによって、こどもたちは無限の創造力を發揮します。創立 30 周年を契機に、水戸こどもの劇場の活動が、21 世紀を担うこどもたちの健やかな成長の手助けになり、貴会がますます発展されることを心から念願し、お祝いの言葉といたします。

私の子どものころ

水戸市青少年育成推進協議会
会長 海野 千秀



水戸子どもの劇場創立30周年、誠におめでとうございます。

私の子ども時代は今から65年以上も前ということになります。何しろ、昭和7年（1932年）に小学校に入学したのですから。

水戸から北へ、約20kmほど、那珂川の近くの農村で生まれ育ちました。テレビはもちろん、ラジオもほとんどの家にはありませんでした。朝7時ごろ、実家の電燈が一斉に消えます。それを合図に学校へと出かけたのでした。

学校から帰ると夕方まで遊びました。不思議なことに、一人で遊んだ記憶がありません。たいていは、男子同士、上級生・下級生入り交じっての遊びでした。遊びの種類も多く、楽しい思い出も、叱られた思い出もたくさんありますが、特に心に強く残っているものを二つほど取り上げてみましょう。

一つは「芝居ごっこ」です。私の家の納屋（物おき）に、近所の子が10人ぐらい集まって、大人の芝居のまねをしたのです。時々、村に○○一座といった芝居小屋がかかり、それを親子でみたのでしょうか。映画（当時は活動写真）もたまには広場でやつていましたからそれらが一緒になって「芝居ごっこ」になったのかも知れません。大将（がき大将）が役割を決めます。私はいつも客を呼ぶ太鼓打ちでした。今も一番自信のあるのは太鼓打ちです。

もう一つは、夏休みの水泳です。毎日、昼過ぎから夕方まで、那珂川へ行っていました。水にもぐつての石拾い、川の中での鬼ごっこ、水中ずもう、クロールなどは上級生の見よう見まねで覚えました。帰りに夕立にあい、雨宿りをしたのも懐かしい思い出です。

異年齢の子どもが一緒に遊び、それぞれいつの間にか立場が変わる、こうした体験ができたことを幸せに思っています。

水戸子どもの劇場のますますのご発展をお祈り申し上げます。

「遊び」（知的ゲーム）が 「学習」だった頃のこと



特定非営利活動法人
茨城NP0センタコモンズ
代表 帯刀 治

校庭で100メートルの縄・綱・紐を結ぶ

それはおそらく昭和20年代末の、わたしが小学校4年生頃のことでした。出雲の田舎の小さな町はずれの高台にあった、1学年2クラス程の小規模な木造の小学校の校庭で、4年生約100名全員が100メートルの縄というか、綱というのでしょうか、紐といつてもよいものも含まれていましたが、ともかく縄と綱と紐が一緒になった100メートルの長さの縄と綱と紐を結ぶため、汗びっしょりになっていました。

前日の終礼（？）の時に、担任の先生から「明日は、結び目も入れて1メートルになる丈夫な縄でも、綱でも、紐でもいいから、忘れないように、もってきてくれださい。皆がもってこないと、できないことだから」というお話がありました。農家も漁師もあり、そうした家から縄や綱をもってくるのは簡単でしたが、商家やサラリーマンの家の子どもたちは1メートルの長さの丈夫な紐といつても、何がよいかと悩んだりしていたように思います。

私もそんな子どもの一人でしたが、それよりも、その1メートルの縄や綱や紐を100人分集めて、それを何に使うのか、ということに疑問というか、興味をもちらながら、友達と下校したことを今でも覚えています。

知的ゲーム—校門から1キロの距離はどこか

前日から、1メートルの丈夫な縄、綱、紐で悩み、何に使うのかと疑問というか、興味を抱き、その当には、正確に100メートルの長さの縄、綱、紐を結ぶ作業に汗をかい、そのうえで「これから学校から町へ出て、校門から1キロメートルのところがどこになるかを測ります」。「それを測る前に、皆に尋ねます。学校から500メートルのところは、どちら辺りになるか、また1キロのところは、（1）農協の前か、（2）郵便局の辺りか、（3）何々商店のところか」といった、今でいえばほとんどクイズのような、知的ゲームも含

まれていて、皆でワイワイいいながら、500メートル地点や1キロのその3択の1つを選んだのでした。校門から100メートルのところ、200メートル、300メートル・・・5回目で最初のクイズの回答が出ました。多くの子どもはハズレでした。さらに、6回、7回・・・農協の前は通り過ぎて行きました。（1）はハズレです。（2）の郵便局も過ぎました。

10回目の1キロは（3）の「何々商店」の前でした。正解だった子どもたちに何かしらのご褒美があったのか、私はハズレだったので、覚えていませんが、皆でとても盛り上がっていましたから、何かのご褒美があったのかもしれません。

その途中でも、大きな道路に面した比較的大きな家に住む子どもと、そこから少し中に入った路地裏の小さな家に住む子どもの家を、もちろん以前から知っていたが、子ども心にも、改めて再認識したり、したものでした。

学習の興味—教室での平均時速の計算

1キロ地点に皆で集合し、そこから学校に帰ります。校門では、先に着いておられた先生が、「何々君は18分」、「何々さんは21分」と1キロを何分で歩いたかを知らせてくれました。教室にかえって、皆の時間を合計し、それを人数で割って、平均値を計算する。さらに、大人（先生）たちのそれを子ども（生徒）たちの違い、男子と女子（当時はこういうのが普通でした）の比較、隣の組の平均値とか、算数の得意な子どもの出番がやってきて、子どもたちの平均時速の計算までやってしまうことになりました。

後になって、大学に入って戦後教育の歴史を知るようになり、その頃まで「コア・カリキュラム」と呼ばれるユニークな教育実践が各地で試みられていたことを知ることになるのですが、このように、その頃の学校は「遊び」（知的ゲーム）を「学習」に結びつけた愉快で、楽しいものだったのです。

私の子どもの頃の遊び

創立時運営委員
神林 犀

○ 自然の中で遊ぶ

私の小学生時代はもう 60 年程も前、朝鮮（今の韓国）でのことになります。父の勤めの関係で、私は小学校 6 年の間に 4 つの学校に通いました。しかし、どの土地も、町は緑豊かな山に囲まれ、水のきれいな川が流れていました。

川は、夏は私たちの水泳場（プール）になり、冬はスケート場になりました。山は、遠足の場所であったり、ときには、全校生徒が参加する「兎狩り」の場所になったりしました。「兎追いしかの山、小ぶな釣りしかの川」一まさに、そんなところに私たちの生活の場があったように思えます。

○ 友だちとの遊び

当時は、パソコンゲームやテレビはもちろん、まんが週刊誌などなかった時代です。ラジオだってどの家庭にもあったわけではありません。子どもたちの遊びの舞台は、家の外です。外にでれば、友だちもたくさんいました。

男子に人気のあったのは「めんこ」です。相手を負かして集めためんこの数や人気の図柄を自慢したりしました。「ビー玉」を使った遊びもいろいろありました。「鬼ごっこ」「かくれんぼ」「石けり」「陣とり」も遊び方を工夫します。竹とんぼ、竹馬は自分で作る。凧上げの凧、こままわしのこまも手作りです。（「朝鮮ごま」は簡単に作れました。）模型飛行機づくりも盛んでした。工作の道具一小刀（ナイフ）は、いつもポケットの中にありました。

いま思うと、男子と女子がいっしょに遊ぶということはなかったようです。

戦争がはげしくなると、「鬼ごっこ」は「戦艦一駆逐一水雷」になったり、「戦争ごっこ」（撃ち合いのまねをしたり、相手を捕らえて捕虜にする）が多くなりました。

○ 子どもの遊びの大切さ

子どもに必要な遊びは、「仲間と共に遊び」「作って遊ぶ」「自然の中で遊ぶ」ことではないでしょうか。そのためにも平和を守ること、みんなでゆとりのある生活をすること—これは私たち大人の責任だと思います。

創立 30 周年に寄せて

竹内 寿美子

水戸こどもの劇場が発足してもう 30 年になるんですね。

そのうち、私は準備会のころからですから、20 数年活動に参加していたことになります。劇場と出会った最初の印象は「どうしてこんなに一生懸命やれるのか。無償で、こんなに子ども達のことを考え行動するなんて。」でした。学校の先生、保母さん、大学生のみなさん、そしてお母さんたち。自分の考え方や思いを懸命に語り、議論し、一つひとつのことを決めていく。本当に民主的な集まりでした。

私は元来、他人との係わりあいが得意でしたから、みなさんの生きいきした姿にびっくりし、経験したことのない世界を目の当たりにして実に新鮮でした。若いころから芝居を観たり、音楽を聴くことが大好きでしたから子どもと一緒にとびこんでいました。茨大の児童文学研究会の方々と児童図書の勉強会などにも参加しました。

私の劇場での最初の大きな取り組みは、東京シティバレエ団のバレエ「シンデレラ」でした。ドキドキしながら事務局長の後ろにくっついて団地や住宅を訪問したり、公園で遊んでいる親子と話したりでお誘いしました。一人で幼稚園にチラシやチケットをお願いすることはとても大変でした。でもバレエ公演が大成功し、子どもたちのうれしそうな、キラキラ輝く瞳をみて嬉しさでいっぱいになりました。親子キャンプや他団体と合同で造り上げた「こどもまつり」など忘れられません。苦しいこともありましたが、楽しさの方が大きく、また多くの人たちとの交流で自分が変わっていく、鍛えられていくことが素晴らしいことのように感じました。

子ども劇場運動は“子どもに夢を！ たくましく豊かな創造性を！”というスローガンで取り組んできたと思います。でもこの言葉を今子どもたちは素直に受けとめられるでしょうか。心が凍るような事件、腹立たしい事件、絶対に許せないような事件。こんな世の中だからこそ真剣に子どものことを考える劇場運動の意義があり、どんな組織形態になろうが原点をみすえる必要があるのではないかと思うのです。

全国連絡会の委員長だった青木妙伊子さんが語られています。「人間はすばらしい。命はとても大切。人間はすばらしいから、無限の可能性があるから、だから生きていける。それをつくる子ども劇場運動の存在と意義をしっかりとみすえ、一生懸命やっていく・・・・」

これから水戸こどもの劇場のご活躍に期待し、もっともっと大きく発展されることをお祈りします。